

325

56

最近贖罪論

オーグスト・サバチエー著
加藤直士譯

東京 警醒社書店

020654-000-7

325-56

最近贖罪論

オーグスト・サバチエー/著

M41

ABI-0470



最近贖罪論

每冊
定價 12
內裝

上海
某某
書店



最近贖罪論

オーグスト、サバチエー著
加藤直士譯

東京 警醒社書店

明治
41 7 22
内交

最近贖罪論

序

譯者曰、神學上の論戰益々盛にして、隨罪説に關する新舊兩神學の態度愈よ明白になれり、吾人は平素舊神學に飽き足らざる者、就中贖罪論に於て彼我の間氷炭相容れざるものあり、仍て余輩は今日まで専ら破壞的態度を取りて各方面より舊式の贖罪説を攻撃し、其の終に成立し能はざる理由を指摘し來れり、既に舊式の贖罪説にして成

最近贖罪論

一

佛國

オーグスト、サバチエー著

加藤直士譯

立し能はざることを明白となりたる以上は吾人は次に建設的態度に轉じて、茲に自ら贖罪の新解釋を行ふか、若くは全然贖罪説を抛擲して新たに救拯觀を樹立するか、二者孰れかの事業に着手せざるべからず、而して此事業の第一歩として吾人は先づ歐米の最も進歩せる神學者の説を紹介するの必要あるを認む、是れ吾人が此書の譯述を公にする所以なり。

オーグスト、サバチエーは佛國に於ける新神學の泰斗にして、其思想の穩健明晰なる其信仰の醇厚敬虔なるを以て一代に卓越せる人物なり、此一篇は『現代宗教思想に於ける贖罪論』と題し、氏が曾て英國基督敎世界誌に寄稿せる大論文にして吾人が今日まで繕讀せる贖罪論中最も能く吾人の意を得たるもの、採つて以て吾人の意見を代表せしむるを得ん歎謹んで江湖の精讀を促がす。

緒言

贖罪に關する古來幾多の神學者の説明は、之を大別して二種となすを得、即ち正反對なる二個の意見の發表たるなり、其の説明の一に從へば、基督の死は罪の赦を贏ち得たるものなり、何となれば其は神の心を動かし神を誘ふて人の罪を赦すに至らしめたるものなれば也、神の恩寵は斯くして耶蘇基督によりて供せられたる賠償の中に其主因を有するなりと、今一つの意見に從へば、神の恩寵即ち罪の赦の依つて以て發生するところの神の慈悲は、固より絶對的にして、其れ自身の外何物にも依頼するものにあらず、其は自足の原因にして、罪人の救拯に就きての所謂第一原因なり、耶蘇の死は神恩の結果なり、救拯の依つて以て効果を奏するに至る歴史的方法なりと、以上の二説を換言すれば、基督

の死が神の正義に對して罪人の負債を償却したるの故を以て神は彼等を赦し給ふなるか、將又此關係を顛倒して、基督は赦さんとする神の聖旨の結果として死せるなりと云ふべきか、二者果して孰れか眞理なりやと云ふことは是れなり、此等二個の意見は其實質の中に、基督教其れ自身に關する二個の甚しく相違せる觀念を包含す、即ち初代教會に勢力を逞ふせる所の裁判的、法律的の觀念と、而して現代に於て漸次に優勢を占めゆくの傾向ある倫理的の觀念と、是れなり、されば其進歩や如何に遅々として且つ困難多くとも、以上述ぶる所の意見の一方より他の一方にまで進み行く上に於て、此問題に關する基督教的思想の進化は成立すと云ふべきなり。

一
聖晚餐式が早き時代より代價的犠牲の禮典として理解せられ遵守

せられたる結果として、初代教會の篤信者の意見は、禮拜並びに信仰の中心點として主の十字架を仰ぎ見るに至れり、されど其精確なる意義と目的とを探究することの必要は餘りに感せられざりき、グレゴリー、ナチアンゼンの如きは此問題を目して『自由講究の一題目』と做せり、此故に吾人は教父等の著述の中に驚く可き程議論の紛々たるを見る、又吾人の注意すべき點は所謂『使徒信經』なるものは基督の死と罪の赦との間に何等の關係をも立てざること、及び『ニカヤ信條』が救拯の事業をば神の子の受肉、苦難、死及び復活を總括したるもの、上に基づくものと認めたる事は是れなり、然りと雖も、最も主要なる觀念は惡魔に對する贖ひと云ふことにてありき、而して面白き研究は如何に此の學說に於て裁判的の觀念が神と惡魔との關係の神話的説明と混同しつゝ、ありやを觀察することに在る也。

六
サタンは人類を征服して之を捕虜となせり彼は之が上に正當なる
所有權を有す而して神は暴力を以て惡魔の主張を拋棄せしめんとは
せざる也正義の神は不義者に對してすら正義の形式を用ゐんと欲し
給ふ故に神は其敵手に一の取引を申し出づ彼は神の子の魂を以て人
間の靈魂に對する代償とせんと提言せらる而して此取引の結果とし
て神の子は死して陰府に降り行きし也若しもサタンが永く救主を牢
獄の中に留め置くの力を有せずともそは神の落度にはあらず即ち救
主が自ら地獄の門を破り其王の權力を亡ぼすことあらんもそは神の
關知する所にあらざる也

サタンは斯くして愚なる取引を爲しぬされど之れが爲めに自らの
外誰れをも咎むべきにあらず彼は持つまじき己が無限の野心の代
として萬事を損失し去りしことは寧ろ當然の事と云ふべし(イレニウ

ス、オリゼン、グレゴリー、オヴ、ニツサ等の説)

されど神の掛引に就ける此の説は一般の人心を満足せしめ得ざり
き、オーガスチンの如きは此説を嘲笑したり彼は基督が神の正義に對
して贖ひを拂ひしにて惡魔に拂ひしにあらざるを確言したりと雖も、
何故に此贖ひの必要が存するかは明かに認め得ざりき彼は著述の或
る所に於て宣言すらく神は其恩寵を以て救拯の他の方法を選択し給
ふべき自由を有す故に若しも神が基督の死を選び給ひしとすればそ
は只だ神が爾か欲し給ひしが故なるのみ而して神はかくして其愛に
よりて我等を回復せんと望み給ひしなりと。

二

十一世紀の末カンタベリーのアンゼルムは其有名なる著書『神人
論』Cur Deus Homo に於て初めて代償説に精確なる形式を與へたり即

ち神の正義の爲めに神の子によりて同量の満足を興へたるものなり
てふ一説是れなり此學説は日耳曼民族的刑法に其基礎と出發點とを
有するもの也凡ての損害は賠償を要す而して此賠償は罪人自ら刑罰
を受くるかもしくは被害者の受けたる損害と同量なる賠償を他人に
代りて支拂ふことによるか二途其の一に出でざるべからず人は其罪
の故を以て神の名譽を毀けたり神の名譽は無窮なるものなれば之を
毀損することは無限の重罪なり故に人もし正確なる賠償を神の前に
提供し得るにあらざれば犯罪者は爲めに無限永久の責罰を蒙りて初
めて其損害を償ふを得べきなり然るに人は決して之を爲すの力なき
なり何となれば若しも人が今後完全に神の命に服従するとしても彼
が斯く服従し得るは元來神の恵みによれるものにて従つて彼は此方
法によりては己が従前の負債を支拂ふに足るべき剩餘の功德を有す

ること能はざればなり果して然らば神自らの應援なき限り人は永久
に滅亡し終るべきものなり只だ一個の神のみが無限の功德を有し給
ふ故に神のみ人類の負債を償却し得べし然りと雖も此の神は同時に
人たらざる可らざる必要あり何となれば拂はるべき負債は即ち人間
の負債なればなり是に於てか神の子が受身して人となるべき絶對的
必要は存するなり更に吾人の注意すべき事あり基督が神の前に人を
救ふの功德を有する所以のものは彼れの德行もしくは彼れの自動的
服従の故を以てにあらざ何となれば基督も亦た彼れ自身の爲めに此
の服従を神より受くるなればなり乃ち基督は彼れの苦難と其の死と
によりて此功德を有するを得る也罪なかりし彼は苦難を受け若くは
死すべき何等の義務もなきなり然るに若し基督にして苦難と死とを
甘受するとせば彼は之によりて罪人の爲めに用ゆべき功德の剩餘を

有するに至る此功德は無限なり、何となれば一個の神の苦難と死とは無限の價値を有すればなり、其は人の負債を償ひ得て尙ほ餘りあるなり、神の正義に對する人間の負債はかくして全く除去せられ、賠償は満足すべき同價格によりて拂はれたり、人は是に於てか救はるゝを得べし、而して是れ即ち神の子の受身と其の死との兩つながら缺くべからざる所以也と。

三

以上述べし如き基督の功德によれる神の正義の満足と云ふ學說がトマス、アク井ナスに依れる僅かの變更を以つて、羅馬加特力教會の正統的教理と成りし事は毫も怪しむに足らず、天主教は此處に「マッス」の効驗と赦罪の實行とに關する最上の憑據を見出したるなり、尙ほ又斯くの如く罪をば一個の拂はるべき負債と倣なし、神の恩寵の適用をば

債權の移轉(負債の辨償)と認むる考へ方は、中世紀の淺薄なる信心と劣等なる道念とを満足せしめたるは敢て驚くべき事にもあらず、げにアンゼルムの説は初代教父の説に比すれば著しき進歩を示したるなり、唯だ吾人の怪訝に堪へざるの一事は、宗教改革家たる人々、就中かのルーテルが非常なる熱心を以つて此の説を承け容れし事と、十七世紀の新教の神學者等が寧ろ一層誇張せる形式に於て、彼の如き熱誠を以つて此説を辯護したる事は、蓋し此説が罪惡を高調するの度の恐るべく強かりし事と、罪人をして自らを救ふ事の全く不可能なるを深く覺悟せしめたる事とは、彼等神學者の心を動かしてかく主張するに至らしめしならん、然るに此説に依れる罪の觀念は如何に嚴肅なるものありしとすも、そは全く人彼れ自身の外部に存するものなり、き罪は神の名譽を傷け其榮えを汚がす、而かも罪が人心の上に及ぼす

損傷腐敗の影響に關しては一言も論及せられざる也。總べて此教理は悔改と和解とを成立せしむべき何等の論理的餘地をも残さざる也。只だこゝに考ふべき餘地あるものは刑罰てふ一事のみなり。此刑罰が一たび神の子によりて受けられ、負債は爲めに償却せられたる以上は、人は當然天國に入るべき資格あり、即ち神の恵みによるにあらず、曾て人類を罪に定めたる其同じ正義の名によりて當然此の權利を有するに至る。保羅乃ち曰く「吾儕は今律法の下に居りて、恩寵の下に居るにあらず」也。

アンゼルムの説は現代の宗教思想の前にありて全く顔色なきまで、に打破せられたり、而して其然る所以は、かのソシーナス、アーミニウス及び十八世紀の唯理論者の徒が此説を以て全く聖書の根本義に背馳し、基督信者の良心に違反するものとして極力之を攻撃批評せるが爲

めのみならず、茲に最も烈しき攻撃を受けしは恩寵の觀念その物にてありし也。此の刑罰的満足説が益す嚴格に論理的に言ひ表はさるればさるゝほど、神恩てふことは益す全く除外せられざるを得ず。既に一の満足が成立したる以上、最早や恩恵の問題は起らざる也。債主が一旦支拂を受けたる時は、彼が負債者の責務を免除したりとて其は毫も恩恵を施しつゝあるにあらず。かくの如く既に満足を受けられたるが故に赦し給ふどころの神は、其實眞に赦し給ふにはあらざる也。神は只だ當然爲すべき事を爲し給ひしのみ、何の恩恵か之れあらん。唯夫れ此説に於て神の恩恵並びに其自由なる赦罪の觀念を維持するの道は、「神が人に要求すべき損害賠償を神自らにまで支拂ひ給へり」と言ふ解釋を行ふにあるのみ。譯者曰く是れ今尙は舊神學一派の贖罪説なり。然るに此解釋たるや元來此説の依つて以て成立する所以の法律的見地

の上より見て畢竟無意義の囁語のみ債主自らに支拂ふなど云ふ事は無意味も亦極れり。贖罪説が此點にまで達したる時は説自らの矛盾によりて倒るゝの外なき也。

四

以上の如く解せられたる満足なる語も思想も共に聖書の中には存せざる也。聖書の中に於ては人の救ひと其罪の赦しは常に純然たる恩恵の行爲より生ずるもの也。其第一原因は神の愛の有り難き決定にありし其の以上に溯るべきにわらず神は愛するが故に赦し給ふ而して神は愛なるが故に愛し給ふ也。救ひの事業が發したるは神の親心よりなり。舊約聖書に於ても凡ての事は此の自由なる無上なる絶對なる恩恵より發す。即ちイスラエルの契約、先祖等と其子孫とに與へられたる約束許されたる解放、忘れられ若くは赦されたる罪惡等一として神

の恩恵より出でざるはなし。此の無限なる慈愛の實現せん爲には、唯だ人々の悔改と神に歸ることと神の恩寵に信賴する事の外に何等の條件も要せざる也。吾人が舊約聖書を精査するに於ては彼の挽回の献物すらも此の神の慈愛に離れては何等の効力を有するものにあらざり。而して此等の儀式は神を満足せしむると云はんよりは、寧ろ人の悔改と信仰とを發表するものと認められたるの事實を發見す而して是れ何故に犠牲献物等が未だ悔い改めざる人、其心未だ碎けざる禮拜者によりて献げらるゝ時に於て、常に神の前に無効なるのみならず實は却つて神の忌み嫌ひ給ふところとなるべきかを説明し得て餘りありと云ふべし。出十九ノ四―六、出三十四ノ五、十、申五ノ二以下、何五ノ六、六ノ六、米六ノ六―十六、歴五ノ廿一、賽一ノ十一、廿六、耶六ノ二十、詩四十ノ六、七、詩四十九ノ七、八、詩五十一ノ十六―十九等参照せよ。

然り而して若しも神の自由なる恩恵の發端が舊約の初めに於てす
ら認めらるゝに於ては、まして新約の全部を通じて此事の現示されあ
るは固よりならずや。耶蘇基督が彼れの説教に於て、罪の赦しと福音の
宣傳と罪人の救ひとを以て、全然天父の自由にして恵み深き決定に基
づくものとして教へ給へる事を證明し主張するが如きは、寧ろ冗辯に
類するの感あり。此の恩恵の必要條件として先づ神の正義の満足が神
の方面に於て無かるべからずとする事は、基督の思想と懸け隔れた
るは恐らく有らざるべし。是れ實に耶蘇と正反對の思想なり。父は赦し
給ふ。彼は唯だ自ら神に在ますの故を以て放蕩兒にまで其腕を開き給
ふなり。神は一人の罪人の死をすら好み給はず、只其悔改と生命とを欲
し給へばなり。太十一ノ廿五以下。路七ノ四十一—五十。路十五ノ十二—
三十二

耶蘇が他の處に於て「多くの人に代り其命を與へて贖ひとならん爲
めなり」と宣ひしは、此の部分的なる宣言の形式、其物と文章の前後の關
係上より判斷するに、彼れは茲に同胞兄弟の爲めに竭すところの己が
愛に就きて語りつゝあり、又其拂ふところの贖ひなるものは其同胞兄
弟等の爲にする者にして神に對つて拂ふ事にはあらざる事を證明し
得て餘りある也。終りの晚餐に於ける彼れの言も亦た之れと同じ。若夫
れ新約の契ひが耶蘇の血を以て封印せらるべきものなりとせば、此の
契約は其根底に於て神恩の賜たるや明にして、其賜は基督の死により
て初めて惹き起されしにあらず。寧ろ其死によりて人類歴史の中に實
現せられたる所のものなりと云はざるべからず。此點に關しては唯か
の大なる聖句「夫れ神は其生みたまへる獨子を賜ふは、世の人に愛
し給へり」(約三ノ十六)といふ一言を提唱するを以て足れりとせんのみ

耶蘇の死は神の愛を發動せしむる原因にはあらず、寧ろ神の愛が基督の降誕と其死との原因たる也。

五

尙又た此の神の恩寵なる思想は、使徒パウロの教訓の中に果して如何に言ひ現はされたる乎。羅馬書加拉太書及び以弗所書の明記するところによれば、世の罪人にまで基督の齋らし給へる所謂神の恩寵(Charis ou theou)なるものは、其一個人たると一國民たると人類一般たるを問はず、全く唯だ神の意旨(Eudokia)其物より發生するなり。(弗一ノ五、六、腓一ノ二八、約五ノ三六、十一ノ四二、約壹、四ノ九)

然らば則ち基督教中の全啓示中、此の一事は、確實不動なるはあらざるなし、即ち人類の救ひの爲めにする一切の神的處置は、皆な是れ神の恩寵より發生する所のものにして、神の恩寵は夫れ自身に於て存在

するもの、何物によつても發生せしめられたるにあらず、故に基督の死が神の恩寵を決定するにあらずして、神の恩寵が基督の死を決定し且つ之を實現せしめたるなり。

反對論者は曰く、新約聖書の中には基督の死を以て舊約の代償的犠牲と同意義に解せられたる幾多の宣言あり、又基督の血が罪を覆ひ且つ之を拭ひ去るものとして記載せられたる場合、少しとせず、基督は果して吾等の爲めに罪となり、詛ひとなり、給はざりし乎。彼は木に懸りし其肉體の中に於いて吾人の罪を負ひ給はざりし乎と。(加三ノ十三、哥後五ノ廿一、西二ノ十四、約壹一ノ七、來九ノ十二、一十六、彼前一ノ二、十九、黙一ノ五等)然りと雖も、以上列記されたる聖書の箇所は、必ずしも先きに引用されたる箇所と衝突するものにあらず、彼等の間に調和を發見すること決して難からざるなり、唯だ之を爲さんが爲めには、吾人の豫

め注意すべき一事あり、他なし、吾人が基督教的啓示を解釋するには舊約時代の利未記的文句に拘泥することなく、寧ろ此等の文句を研究し、使徒等によりて舊約書より引用されたる凡ての比喩印象を解釋するに、飽まで基督教的啓示の精神を以てせんことを覺悟すること是れなり、換言すれば舊約的思想を脱して新約的精神になりて此等の文句に接することは是れなり、肝要なる一例を擧ぐれば、古代の犠牲(舊約)とカルバリ山(山上)の其れ(新約)との間に存する比較對照に於て、其處には一個の明白なる差異の存するものあるを見るべし、古代の犠牲に於ては屠らるべき献物は其意思に背きて死にまで渡され、犠牲を献ぐる者の白刃の下に反抗じつゝ斃るゝなり、カルバリの場合に於ては犠牲は他より献げられしにあらで彼れ自らを献げし也、彼れの死は愛の顯現なり、人若し基督の犠牲は如何なる點に於て優れりやと問はゞ、そは彼れ

自身を捧げたる愛の行爲の中に存すと答ふるの外なし、此愛こそは彼れの死の眞髓を組成するところの者にして、世の罪を償ふ功德の全部たるなり、試みに吾人の思想に於いて基督の死より此の愛を除き去らんか、其の鮮血淋漓たる悲惨の刑罰を以てして、吾人は牡牛や山羊の血に存する以上の贖ひの功德を其處に發見すること能はざるべし、之に因つて見れば、肉體の苦痛や流血やの如きは如何に慘憺たるものありども、其は畢竟基督の愛の符號、明瞭なる表出、感動すべき發現たるに過ぎざる也、此意味に於て基督の苦痛大なれば大なるほど吾人を感動せしむるの度も亦従つて大なり、何となればそは彼れが如何に多く吾人を愛し給ひしかを示すものなれば也。

六

然りと雖も、基督の死は打ち消し得ざる愛の表現たること聖書の明

示する所なると同時に、他の一面に於て其は罪の責罰たりと見るべきものなきにあらず。罪人は茲に自己の靈魂が其の靈魂を救はん爲めに全く自らを予へ給へる一人によりて如何に切に愛せられたるかを見るべく、又彼れは自己の罪が其の最も殘虐なる形に於いて其最も極端なる程度に於て其處に表現せられたることを發見すべし。斯くして彼れは聖と愛とを兼ね現はせる基督の苦痛にまで二重の意味に於て自らの結び付けられ居るを知るべきなり。然りと雖も以上述ぶるが如き罪の責罰は救主によりて忍ばれたる苦痛の分量によりて定まるにあらず。唯だ罪人の心の中に呼び起されたる罪の自覺の程度によりて定まるなり。愛に依れる神の正義の勝利なるもの何處に存するやと云ふに、こは彼の十字架の上に客觀的に罰されたる罪惡が同時に各自のクリスチャンの良心の中に主觀的に責罰を受くることと是れなり。クリス

チャンは斯くして衷情より神に還り行く内心の實驗によりて自らの罪と絶ち、罪にまで死し、而して新しき生命に甦るに至る。是れ豈に神の正義の完全なる勝利にあらずや。羅六ノ一七保羅の解したる神の正義なるものは單に罰を行ふの力にあらずして、他を義とする所の義即ち惡を行ふもの、心中に於てすら惡の上に勝利を博するところの義たりし也。此の神の義に關する保羅の眞意を捕へんと欲せば、吾人は先づ基督が其愛によりて罪人と結合し給ふ事、並びに罪人が悔改と信仰とによりて十字架に懸けられたる基督と結合し得る事、一種神秘的なる保羅の同體觀を理解せんことを要す。保羅の所謂神の義 (Dikaiosune theou) なるものは、罪に對する神の消極的的反動たる神の怒 (Orge theou) 及び罪人を愛せでは已まざる神の愛 (Charis tou theou) との間を調攝するものなり。即ち神の義は犯せる罪の罰によるにあらず、罪其物を滅ぼすこと

によりて、罪人を救ふなり。言ひ換ふれば罪に對する神の怒りと、罪人に對する神の愛とは、兩つながら罪人の罪を滅ぼして之を義たらしむる神の正義によりて満足せらるゝ也。羅三ノ廿六而して是れ眞個の贖罪にあらずや。何となれば罪は只だ改善によりてのみ眞に能く償はるゝもの、即ち救ひは罪の撲滅によるの外なければ也。

七

以上はアンゼラムの説に反對して聖書の教理を説明せるものなるが、今之を總括して要點を摘録せんに概ね左の如し。

第一、アンゼラムの意味に於ける救の必要條件とし豫備としての「満足説」なるものは、常に聖書に見出されざる思想なるのみならず、神の恩寵の絶體無上なる自由の觀念と矛盾する者なり。

第二、聖書に於て現はされたる神は、十字架上の基督の身に於て罪人

を罰し之を誣ひ給ふ無慈悲の審判者にあらずして、自己の愛によれる其子の献身を受け容れ給ふ天父にてあるなり。

第三、かの基督の服従を積極的消極的の二種に別ちて、かの完全なる消極的服従の故を以て基督は罪人に與ふべき功德を積み給へりとする見解は全然聖書に見出し得ざる所なり。「基督の功德」なる語其物すら中世紀の意味に於ては全然聖書の教と衝突する者なり。

第四、基督罪人の爲めに身代りとなれりとの思想は、若し之を法律的辯償の意に取らずして、道德的結合の意に解するに於ては、聖書の意見と符合するところ無きにあらず。此場合に於ては基督は其愛によりて人と合一し、人は其信仰によりて基督の苦難と死とに、自己を結合し、所謂「基督と共に死するは彼と共に生れん爲め也」として道德的事實として之を解すべきのみ。

以上列挙する所によりて見れば、贖罪論中の最も勢力ありたる彼の「満足説」なるものは最早や今日に於てクリスチャンの思想として正當なるものにあらずるや明かなり。

八

吾人若し思ひを轉じて、現代の神學が贖罪論の問題に關して如何なる方向に進みつゝありや、即ち過去一世紀の間に於て世界の神學思想が到達せんと努めたる一般的目的は那邊に存するやを發見せんと欲せば、其解答は必ずしも得難きものに非ず。舊説の最大缺點は其の法律的性質に在りて存す之に反して現代の基督教的思想は此贖罪の教理をば法律の見解より倫理の見解にまで高めんと欲して絶えず努力しつゝあるもの也。即ち彼の人為的刑法の論理に基づける抽象的なる妄誕空理の代りに、徹頭徹尾道德的生活の實在を以て、人類救拯の事業の

徑路を説明せんと欲するものなり。吾人の神學思想が或は神自身の事に關しても、或は基督の救世の事業に關しても、或は人の義とせらるゝ事に關しても、若夫れ吾人クリスチャンの良心にして到る處に道德律の活ける働きを發見するにあらずるよりは、以て現代の宗教心を満足せしむる事能はざる也。換言すれば贖罪の原理を夫の形而上學的もしくは法學的解釋より救ひ出して積極的効驗の根源たるべき夫の道德的行爲にまで變化せしむるにあらずるよりは、現代のクリスチャンの發達せる良心は決して満足すること能はざる也。斯くの如き眞意義に於て贖罪を理解する事は、即ち是れ天界を地上に持ち來らす所以なり、超自然的秘義を人類歴史の中に織り込む所以なり。此は毫もイエス、キリストの事業を稀薄にするものにあらず、彼れの十字架の意義を無視するものにあらず、寧ろ却つて斯くの如き見解は基督の事業の眞正の

目的は果して何處に存するやを明示するもの也。即ち彼れの事業の目的は神の怒を宥めて神を人にまで和解せしむるに在らず、其の反對に人の道徳的再生によりて人を神にまで和解せしむるに在るを示すもの也。使徒パウロが哥林多後書五章の十九節に云ひし如く、神は死にまで忠誠なる「基督」に在りて世を己れと和がしめ「給ひしなり」。

九

以上述ぶるが如き倫理的見解の採用より生ずる結果の一は、夫の舊神學說の中に存する神の正義と神の愛との抽象的衝突が爲めに消失し去ること是れなり。若しも神の正義なるものが單に消極的刑罰的のものにして、善を以て惡に勝つを最終の目的とするものにあらずとせば、それは遙に人間の正義よりも劣等なるものなり。言ひ換ふれば罪に對する神の罰が畢竟するに道徳的向上と救拯とを目的とする一個の教

育的意思想を含むものにあらざる限り、それは人間の正義に勝れるどころありと云ふべからず。果して然らば一方に於て神の義は其れ自身既に神の愛たるなりと云ふべき也。

更らに又た神の愛なるものが單に一個の溺愛に過ぎずして、人の罪を除去することなしに罪の苦痛を鎮壓するを以て能事足れりとする如きものならんには、それは人間の父の純全なる愛よりも遙かに劣等なるものと云はざるべからず。見よ人の父すら其子を赦す事と之を救ふ事とは全く別事にして、罪の赦しが其子の悔改と遷善とを來らしむる効果を有せざる限り、何等の意味もなき者なるを熟知するにわらずや。况んや神に於てをや。果して然らば他の一方に於て神の愛は同時に其の義たるなりと云はざるべからず。

斯くの如く神の愛と義とは決して相離れざる同一物の兩側面たる

以上は、此の二者を先づ互に對峙せしめて然る後ちに之を調和せしめんと努むる如きは、純然たる假構の曲事たるに過ぎざるや明かなり。基督の死の目的は神の氣質を變化せんとするにあらず。寧ろ神の赦しが如何なる條件の下に吾人の良心に於て實現せらるべきやを説明せんとするに在りき。即ち罪人彼れ自身の罪の自覺及び其結果たる罪の實際的破滅によりてこそ、神の赦罪は吾人の衷に實現せらるゝなれ。

十

刑法的贖罪觀に於ては可能なれども、倫理的贖罪觀に於ては不可能なる今一個の妄誕は、刑罰と罪惡とを分離して考ふることを從つて罪の赦しに對する勳蹟を以て一人より他の一人にまで移轉せしめ得るものと考ふる事是れなり。抑も道德界に於て罪に對する最大にして且つ最も嚴肅なる刑罰は、外部より來る苦痛にもあらず肉體の死にもあらず、只だ人の内心に於ける罪の自覺、即ち罪人の良心中に存する内部の呵責其物にてある也。斯くして道德的墮落は夫れ自身に於て刑罰を伴ふもの也。是れが故に當に罪なき者を罰することの不正なるのみならず、そは實際に於て不可能の事に屬す。而して其單純なる理由は無罪の人は罪人の良心を有すること能はざるが故なるのみ。基督は人間の裁判によりて罪せられ給へり、而かも彼れは神によりて罪せられ給はざる也。十字架の死に於いて人類の不義を忍び給ひしことは基督に取りて有り得べき事なり。雖も神より來る一個の刑罰として苦痛を受け給ふが如きは、彼れに取りて全然有り得べき事にはあらざる也。

十一

同一なる理由に於いて、夫の罪の附着する外部の苦痛の除去せらるると共に、假令罪の惡念と暴威とが未だ心裡に存するとも、罪は眞實に

赦免せられたるなりと考ふる事の如何に妄誕なるかを知るべきなり。人は自ら罪ありと感ずる限り彼れは未だ赦罪の實驗を有せざる者也。故に贖罪の要點は忍ばれたる苦痛の分量によると云はんよりは寧ろ罪その物の消滅の程度如何に在りて存するものと云ふべき也。基督教的赦罪の意義をして一個の空理妄誕たらしめざらんが爲には、基督吾人の爲めに死し給へりてふ一事を以て足れりとすべきにあらず。夫れ以上の絶對的に必要なる一事は、使徒パウロの言ひし如く吾人が基督と共に死せる事、即ち吾人の信仰と悔改とが吾人の良心の中に救ひを完ふし、宛然死によれるが如くに罪の結果を我が衷より掃蕩し、而して道德的復活の一種によりて、新生命を我が衷に創造する事は是れなり。贖罪は斯くして吾人の内部に起るべきものにして吾人の外部に起るべきものにあらず。贖罪説が倫理的性質と倫理的價值とを捕へ來る所以

のものは唯だ斯くの如き見解によるの外なき也。

十二

果して然らば耶蘇の死は、神の心を動かして人類の罪を赦さしめたる形而上の原因にはあらずして、神の恩寵の經綸が之れなくては地上に實現し得られざる、必須至要の歴史的事實なりしと云ふべきなり。そは結果の原因に於けるが如く人類の罪と至密の關係を有するもの也。而かも此の至密の關係を理解せんが爲めには必ずしも神の性質に於ける或種の超自然的演劇の意味を耶蘇の死にまで附着するを要せざるなり。

人類の道德的發達の状態は、耶蘇の死の萬己ひを得ざるに出でたるを説明し得て餘りあるを見る。人の子多くの苦みを受け且つ殺されんと宣ひし基督の言を解せんとするには、吾人は只たイエス、キリストの

如何なる人物なりしか、而して彼れの生活せる當時の道德的並びに社會的境遇の果して如何なるものなりしかを記臆するを以て足れりとせんのみ。先哲プラトリーの智慧は既に吾人に告げて曰く、完全なる義人が不義邪惡なる此世に處するに當りて虐殺的憎惡を惹き起さずしては有り得べからずと、眞に然り、人苟くも人民の間に善事を行はんとするや、彼れは彼等の爲めに苦痛を忍ぶことなしに其目的を達すること能はざるは古來爭ふべからざる歴史上の法則なり。

基督の生涯と事業に於ける特別なる要素は、彼れが此の人類共通の重荷の全重量を自ら進んで之を負担し、己が使命として其苦痛を甘受せられたる所に存す。此の人類の有機的一體觀より生ずる峻嚴なる事實は、イエス、キリストの良心を通はして一個の道德的義務にまで化成せられたり。人類は其根底に於て一體なりてふ意識は事實としてキリ

ストの一生に活現せられたり己が聖き一生と罪人の運命との間に存する結合を、其死によりて神聖にして破るべからざるものたらしめ、凡ての人類の上に懸りたる一切の悲痛を自ら我が身に負擔し、以て其死を以て人類の救ひを封印し給へるものは、是れ實にイエス、キリストの箇人的愛の然らしむる所なり。

此の愛は彼れの全生涯をして初めより終りまで一個の犠牲たらしめたり、而して此犠牲こそは彼れが自ら進んで同胞人類の爲めに捧げ給ひしものなれ。彼は神に捧げしにあらす、神は之を要し給はざればなり。彼は惡魔に捧げしにあらす、惡魔は之を受くるの權利なければなり。彼は實に人類の爲めに捧げたるなり、即ち雷に罪の罰より人を助け出さん爲めならず、罪其物より救ひ出さんが爲めなるなり。彼れの愛によつて基督は吾人罪人の衷に入り給ひ、吾人の罪惡を己が身に結び付け

給ひ、而して吾人をして悔改と信仰とを以て彼れと共に罪に死するに
よりて、茲に初めて彼れの義に合體すべく復活し來るを得せしめ給ひ
しなり、是れ豈に基督の救にあらずや。

十三

以上述べたるが如く罪の贖ひを以て基督の愛の事業に歸せしむる事
は、毫も其効力を低減する所以にあらず、寧ろ其の悲劇を深刻ならしめ
其効驗を顯著ならしむる所以なり。そは最早や單に刑罰を耐へ忍ぶこ
どの問題にあらず、寧ろ進んで罪人を救ひ出し其罪惡を絶滅するの行
爲たるなり。

贖罪説の斯くの如き變化は其結果の一として、基督の生涯と其事業
の中に存する道德的統一を回復するを得せしめたり。かゝる統一は舊
神學が夫の消極的及び積極的服従の區別を樹立することによりて、一

たび基督の一生に破壊せしめたるものなり。抑も消極的服従とは何の
意ぞや、是れ言語自らの矛盾にあらずや、敢て問ふ、耶蘇の靈魂は夫の受
難週の苦痛并びに十字架上の悲惨の時に於けるよりも、果して何れの
時かヨリ多く道德力の活動と聖き眞勇の發揮とを示したりし乎、耶蘇
の生涯には已むを得ずして爲されたる消極的服従なるものある事な
し、彼れの生と死とは連続せる一個の積極的服従の發現なり、其一生は
不斷恒久の献身にして、其一死は光榮ある生涯の冠冕たるなり、舊神學
が基督の生と死とを分離して考ふる事は其大なる誤謬の一たるなり。
勿論基督の死は特殊なる位地と價值とを有するに相違なしと雖も、そ
は畢竟最も明確にして顯著なる方法に於て、彼れの全生涯の犠牲献身
を其の中に集注し、餘蘊なく其精神を發揮したるが故なるのみ、基督の
生と離れたる其死は吾人其の幾許の價值あるやを知らざる也。

次に斯くの如く主として道徳的に人道的に贖ひを解釋する事は、之をして宇宙の道義律に密接なる關係を有せしむるに至る。即ち他を愛する所の者は、己が救はんと欲する人々の爲めに、其の苦痛の幾部を自ら引き受けざるべからざる宇宙一貫の犠牲の法則是れなり。吾人は一般に永久に此法則によりて支配せらる。世界は自ら其責めを負擔する所の人々の献身的愛の故を以て、其罪惡と悲痛の重荷より救はるゝなり。母は其誤れる子の爲めに苦しみ、其苦痛によりて彼れを改心せしむ。是れ愛によれる救拯の宇宙的法則なり。されば如何に超自然的に如何に神妙に基督の十字架の死を表現すればとて、彼れの救世の事業は決して人生の經驗と懸け離れたる。又は全く理解し能はざる如き性質のものにあらず。そは密接に「愛は其度に應じて代償を支拂ふものなり」て

ふ犠牲の法則に關係して起れるものにして、吾人をして一層明かに此法則を會得せしめ、又一層深く此法則に服従せしむる所のものなり。基督の犠牲は偉大なる救濟力なり。何となれば愛の救濟力は此世の最も善良なる聖人君子の間に於てすら、未だ部分的にして不充分なるを免れざれども、獨り基督の愛に至りては完全無缺にして、従つて其献身は絶對無比なるを以てなり。

十六

果して然らば耶蘇基督は救世者の主領なり。罪と死との勝利者なり。而かも彼れは最早や唯一人あるにあらず。彼れは自らに倣ひて同胞を愛し其爲めに献身するの覺悟を有する凡ての忠實なる弟子と其事業を共にし給ふ。彼れは其弟子の各自にまで負ふべき十字架を與へ給へり。而して基督の意味に於ける凡ての十字架(人の爲にする苦痛)は悉く

皆な救拯の手段たるなり使徒パウロは哥羅西書一章二十四節に於て、吾人の冷淡なる信仰を震動せしむるばかりに痛切深刻に此思想を言ひ表はせり曰く「今われ爾曹の爲に受くる苦しみを喜び又わが肉體を以てキリストの體すなはち教會の爲に其患難の缺けたる所を補ふ」と斯くしてイエスが其弟子に命じて地上に永續せしめんとする所は、單に其の遺したる教訓のみにはあらず又實に吾人をして彼れの未完成なる苦痛と死とを此世に系統せしめんと欲し給ふなり彼れの教會の不朽の體の中に再び生きつゝある所のものは、獨り預言者たる基督のみにはあらず、寧ろ其弟子の中に苦痛と死とを系統せらるゝところの犠牲の基督自身にてあるなり彼れは其弟子によりて又其弟子の爲めに、世の終りまで愛の聖餐を供し給ひ、以て凡ての人類の救ひの完ふせらるゝ日にまで及ぶなり。

十六

以上吾人は此贖罪の問題に關して、基督教者の良心が見て以て正當とする所の見解を畧述し終りぬ、若し夫れ吾人が此處に止まるを以て足れりと思せず、更に進んで吾人の經驗の結果以外に入りて、何故に自己の犠牲が救ひの代價として必要なるか、斯くの如き道德界の法則は果して何處より來りしかを研究せんと欲せんか、吾人は誰だ自己の無能を告白せずんばあらざるなり、高遠なる哲學上の此問題に對しては、吾人を満足せしむべき答を見出すこと甚だ難し、余は告白するを憚らず、余一個としては夫の堅牢なる基礎が吾人の脚下より崩れ去るべき此の境界線を越えては、進んで此法則の出處如何を探究するの寧ろ徒勞なるを認むるものなり、而して斯かる質問に對しては、余は耶蘇と共に「父よ、然り、斯くの如きは聖旨に適へるなり」と答へんと欲する者なり、問

題は結局此の法則の最終の目的は靈的生命の發達に存するや、將又た
 罪の刑罰に存するやと云ふに歸すべし、即ち義人の苦み救主の死は罪
 の刑罰として見るよりも、寧ろ靈性の發展として見るべきものにはあ
 らざるかと云ふに歸するなり、是に於てか吾人は實に神の天地創造の
 秘義にまで接觸することゝなるなり、世界の根本的組織上の法則をば
 吾人クリスチャンの特殊なる經驗のみによりて解釋せんと欲するは、
 抑も妄舉といはざる可らず、人間の論理は之に對して狹隘に過ぎ淺薄
 に過ぐ、宗教的智識の健全なる批評的學説は、吾人を導きて何物よりも
 先づ慎重の態度と自己の不信任とに達せしむ、吾人の擬人的神觀、神の
 行爲と其意匠に關する吾人の思想は、頗る不適切なるものにして容易
 に自家衝突に陥らしむ、神の仕方は吾人の仕方にあらず、神の思想は吾
 人の思想にあらず、此等の秘義の前には人類の最も學識あるものも、最

も謙遜なるものも、共に黙して佇立せんのみ、吾人は如何に大なるにせ
 よ小なるにせよ、凡ての人類に向つて殘る所の特權は、唯だ實行上の敬
 虔信仰あるのみ、吾人の爲すべき所は歴史に於ける神の恩寵の事績を
 默想し、其恩寵を吾人の心情に受容し、而して吾人滿腔の感謝の對象と
 して之を景仰し認識する事是れ也。

最近贖罪論

明治四十一年七月十九日印刷
明治四十一年七月廿五日發行



譯者 加藤直士

發行者 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 福永文之助

印刷者 東京市京橋區日吉町四番地 渡邊爲藏

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 警醒社書店

印刷所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社印刷部

トルストイ伯著
加藤直士譯

◎我

懺

悔

定價 四十錢
郵稅 六錢

本書は翁の人生哲學とも稱すべきものにて彼の人生とは何ぞやとの問題に關する
彼が心裡の苦惱、煩悶、奮闘の活歴史なり

加藤直士譯

◎トルストイの人生觀

定價 五十錢
郵稅 六錢

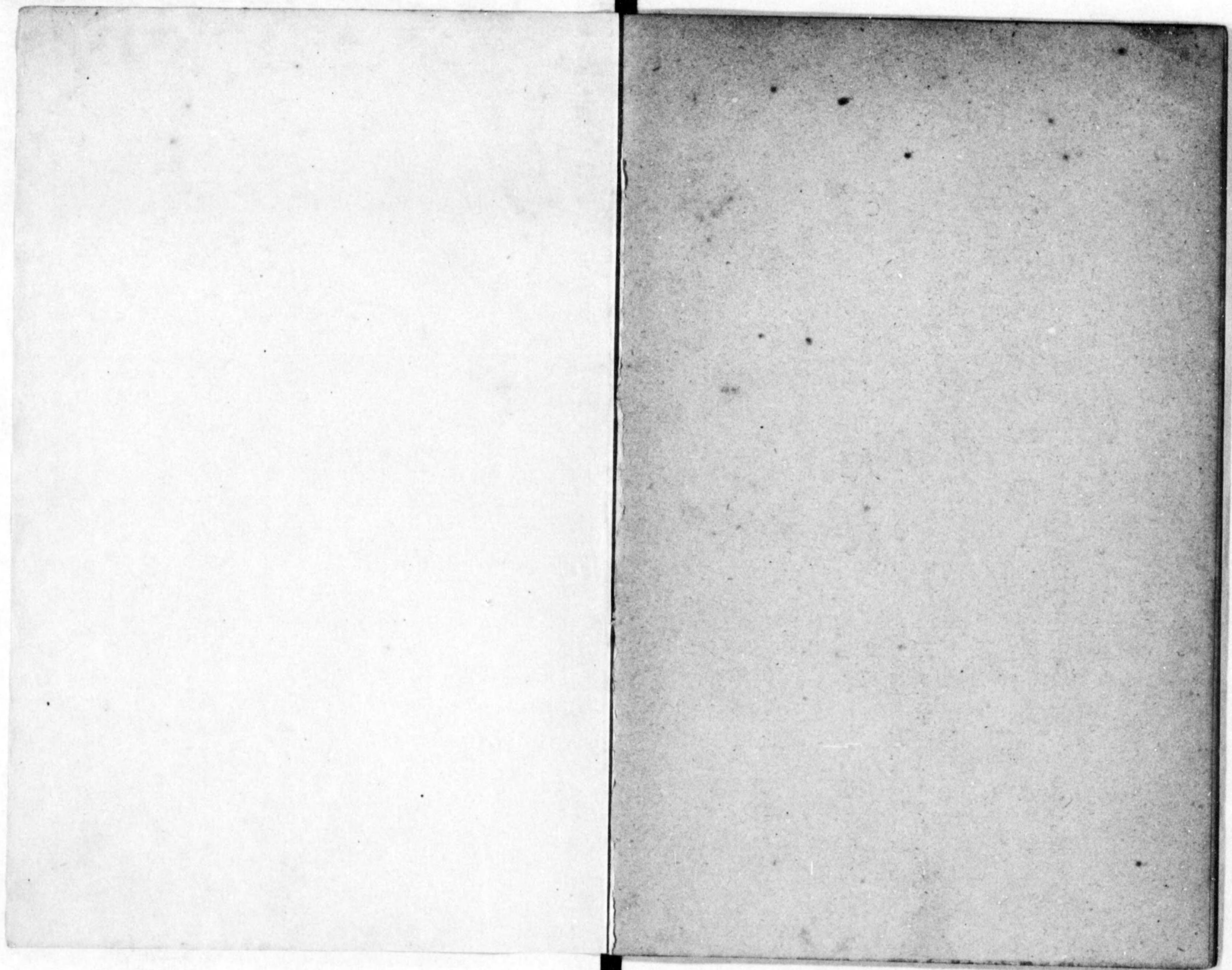
松村介石先生卷頭に序して曰く『加藤君や自ら其境遇に立ち自らトルストイと抱
合し得たる者其の之を紹介するに當りて精神の凜乎たる文字の活如たるある怪し
むる足らずと』以て其内容を知るべし

加藤直士著

◎宗教界の三偉人

定價 十五錢
同 四錢

是れ愛と貧との福音を唱へて十三世紀の宗教界に大革命を興へたる聖僧フランシ
ス、サボナローラ、フレデリッククロバルトソンの三偉人の傳記なり



55
56

